会　報　37　　白鷹町史談会

史　　談

2015（H27）　　２．２

■　深山観音堂（観音寺観音堂）境内発掘調査が行われました

かつて本尊千手観音菩薩が祀られていた観音堂が焼失し、焼けた本尊が秘仏として現在のお堂に祀られたといいます。その焼失した観音堂の遺跡を確定する発掘調査が 10 月 15 日から始まっていいましたが、その中間現地報告会が 11 月 6 日（木）13 時 30 分からありました。

出てきたものは縄文時代の剥片石器、大木 10 式縄文土器片、そして焼土と炭、建物遺構とみられる石です。本尊千手観音は立木観音なのですが、それが建てられていたのではないかと思われる場所には太い杉の木があって、その切り株でまだ掘り進められないと、発掘にあたった平吹利数先生から説明がありました。

出てきた炭を分析するとその年代がはっきりするわけなのですが、予算の関係でできるかどうかは不明だそうです。何とかできればいいと考えます。

正式な報告会は未定とのことです。はっきりしたらまたお知らせします。

■　直江兼続書状を読み解く
（内容と年号特定への考察）
「白鷹町我が家のお宝展」余談

佐藤與七

去る八月中の「白鷹町我が家のお宝展」の際、特別展として常安寺の本庄家宝物の数々が展示されたがそのうちの「直江兼続書状」について、この書状の内容と書かれた年号を特定する考察を試みた。

先ず、昭和二十五か六年頃に工藤定雄山大教授が解読した訳文を頼りに、口語文に直したもの（別紙）を参照しながら読んでみた。

この書状は上洛していた兼続が、去る四日附けの本庄繁長の書状を受け取って読み、その返信を米沢に居る繁長宛に出したのものである。

この書状の本文と尚書き（追伸）の内容を詳しく読んでみると、

本文の始めの方は書状を入手したことの御礼を述べた後、「然れば佐兵衛事」と切り出しているのをみると、繁長は佐兵衛から、米沢に移ってからの住所に関して何らかの相談を受けたので、それに対する兼続の意見を求めたらしく、それに兼続が答えている内容のようである。

兼続も佐兵衛の件については関係ある人達とも相談し、景勝にも許可を得ているが、彼は当初から佐兵衛を在郷の方にと考えていたが、この度使者には「私が帰国してから佐兵衛と直接逢った上で決定するから、それまでは何所とも居所を決定するな」ということを言ってやった、以上のような訳で、彼が帰国した上で身分次第に住所を定めようと考えているから、近日中に帰国したら福島の城でお会いしお話ししましょうといっている。

追伸で書状を届けてくれたそのお礼と、此方の無事を報告し、次に兼続が米沢から上洛する時は、諸々の計画も中途のままであったので、諸々の計画に沿った事業も未だ中途であるということへの言訳めいたことを述べた後、竹松が変わりなく元気でいるとのお知らせに一安心している、私の留守中に何か変ったことがあったらよろしく御教導下さいと繁長に頼んでこの手紙を終り、日附は三月十日となっている。

以上が書状の内容であるが、この書状に出て来る竹松と佐兵衛の二人は何物であるかを特定しなければならない。

そこで目を付けたのは、兼続が本文の佐兵衛と尚書きの竹松の名前を苗字を付けず呼び捨てにしていることだ。兼続が他人の名前を呼び捨てに出来るのは自分の家臣か身内の人しかいないと考えた。それで直江家の家系を調べてみると、兼続の長男平八景明は一五九五年（1594）

生れで、幼名を竹松といったことが判明した。

また本文の佐兵衛であるが、こちらは元服が終った成人の名と見たので、兼続の家族や家臣の名前を調べていったところ、兼続の長女於松に婿養子を迎えていた事実があり、その婿養子は本多正信の次男で、名を佐兵衛（婿入り後の直江大和守勝吉、一万石）といった、ということも分ってきた。それならこの婿養子を迎えた時期は何時であったか。その年は慶長九年（1604）であったことを突き止めた。

もう一つ、尚書きの前半の「為半積御上洛、方々作事半ニ候」の内容を推察してみる。上杉藩が秀吉の命により、越後から会津・米沢百二十万石に移されたのが慶長三年（1598）で、この時は兼続は米沢六万石であったが、関ケ原の戦の翌年、慶長六年（1601）には家康の命によって米沢・伊達・信夫三十万石に減封されたのであった。しかし殆んどの家臣を解雇せずにそのまま移住したから、当然家臣の住む所もなく、米沢の在郷に屯田兵として配置するなどの外なかったが、それには河川の災害対策の築堤や、膨大な数の家臣達の飲料水・田畑の灌漑用水などの為の大規模な土木工事の計画を立てそれを完成させなければならなかった。

これらの大事業がほぼ完成し、正式に家臣の屋敷割が行われて漸く落ち着いたのは、慶長十四年（1609）以降であるといわれているから、この書状の書かれた頃の家臣の住居問題は、独り左兵衛だけのことではなく米沢藩全体の問題であったと思われるのである。

余談になるが、当時の直江家の動向をみて不可解に思うのは、兼続には十歳になる長男景明がいたのに、なぜ佐兵衛を養子に迎える必要があったのかである（一説によると直江の主君上杉景勝には男子がなく、この婚姻によって男子が生れたらその子を景勝の養子にして世継ぎにとの思惑もあったらしいが、この婚姻の三ケ月前には景勝の実子定勝が生れているのにである。）この景明はこの十年後に二十一歳で世を去っている。

また佐兵衛も婿入り後の翌々年には妻と死別しているが、慶長十三年の米沢城三之丸の普請では兼続の補佐役となって活躍している、かと思うとその三年後には直江家を去って元の主家毛利家に仕えるという不思議な人物であった。

右に兼続の書状を詳しくを読んでの感想を述べたが、右の事から私が推論した慶長九年（1604）という年号が正しければ、工藤教授の訳文「註解」にある天正十六年という年号も否定されることになる。　（平成二十六年九月）

資料　兼続の手紙とその内容

（本文）

去四日之御状今十日参着、則拝見、御懇情難申謝シ一存候、御経中在米沢仕儀候由候、御大義之至候、我等爰元御用相済候之条、近日可二罷下一候、然者左兵衛事、当夏中其地へ可二罷移ル一内存ニ候条、此方各へ相談シ、大方落着申候、就レ之住所之義蒙リレ仰候、拙者も兼而者在郷ニ可二指置一由ニ存ジ候へ共、今度使者ニ申越候分者、罷下之上拙者直談を以居住可二相定一候条、其以前ハ何方共相定メ間敷之由候、右之仕合ニ候条、下着之上、其身分別次第与存候、兎角ニ近日可二罷下一候条、於二福島之城一可レ得二御意一候、恐々謹言

三月十日　　直山城守兼継　花押

本越州様　　貴報人々御中

尚々被レ二入御念一、預二飛脚一忝次第存候、此方無二相換義一候、為二半積一御上洛、方々作事半ニ候、又竹松息災ニ候由令二満足一候、留守中自然之義候ハハ被レ加二御異見一頼入候以上

（訳）

去る四日のお手紙今日十日到着しすぐ拝見しました。御懇情お礼の言葉もありません。

（謙信公の）命日中は米沢にて忌服との事ご苦労様です。私共も御用が済みましたので、近日帰ります。

ところで左兵衛のことですが、この夏の中にそちらへ移り住む事になって居りますのでこちらの方々に相談し、大体決まりました。また殿（景勝）からも左兵衛の住まいの事について仰せがありました。私も前から在郷の方へ住所をと考えて居りましたが、この度は「私が帰国した上で、私と直接話し合って住所を決めますから、それまでは何所と決めてはならない」と言ってやりました。そんな事ですから私が帰国した上、各身分次第にしたいと思います。兎に角近日帰国しますので福島の城でお逢いしてお話ししましょう。　敬　具

（慶長九年）三月十日直江山城守兼続（花押）

本庄越前守様へ　ご返事まで

追伸　御念入りの飛脚を届けられ有難く存じます。此方は変わりありません。諸々の計画も途中で上洛しましたので、方々の事業も中途です。また竹松も元気でいるとのこと、一安心しました。私の留守中に何か変わったことがありましたら、よろしく御教導下さるようお願いいたします。　以上

■　道智道・「萱野――木川」間を歩く

丸川二男

九月十三日、山岳会の伊藤さんと六月の続きで、萱野から先の木川までの古い道をさがすべく、朝からでかけた。天気は曇りのち晴れの予報だが、霧雨である。高岡の黒滝橋手前の三叉路で落ち合い、国道交通規制のために最上川に沿った左岸の迂回路を通って、一ツ沢林道の奥に進む。かつては萱野からこの道を歩いて下り、朝日川の対岸出てから川沿いに木川の分校跡まで行ったことになるのだが、自分ことでありながらここを歩いたのが信じられないような道である。

今回は萱野に入る分岐点を過ぎて、林道の終点まで車を走らせ、そこから地図を頼りに木川に下る道をさがすというのが目的である。つまり、この道こそが木川のつり橋に行き着く道であり、湯殿山参詣の道、すなわち「道智道」の本道なのである。私たちが昭和五十四年に歩いた時に萱野で木川に下る道を土地の人に聞いたが、「木川のつり橋は流されて渡れない」といわれて一ツ沢に下り、木川の分校跡まで歩いたのである。これは大変な回り道になるのは地図の上でもわかったが、先の道もわからず、橋が渡れないと聞くからにはやむをえずに一ツ沢に下ったのだった。

林道の終点から地図に載っている点線が登山道の一部であろうと先に進むが、途中で道が切れてなくなり、峰や沢筋にそれらしい道がないかとあちこちさがすがわからない。見通しのきくところに立ってみるとに下に沢の合流点あたりも見えるのだが、かなりの急斜面で人が歩く道にはちょっときびしすぎる気がする。

そうしているうちに伊藤さんが、さっき来た道の途中から分かれている向かいの山の杉林あたりにも林道があり、その先の山道が下の沢の合流点で合わさっているというので、そっちにいってみることにした。実際の山の中に入ってみると、地図には現されていない道があちこちに走っていた。

林道の奥まったところにあった少し広い場所に車を止め、手入れのされていない林道のような山道を少しばかり歩いたら、また円形の広場のような所に出た。ここが車の入れる最終地点のようだった。周囲のカヤやぶを分けると中に道形があり、中に入って行くとそこはしっかりと踏み固められた山道であった。

途中の沢までは降りたが、道そのものが斜面に張り付いたように残っているところもあれば、地すべり状に流されて無くなっているところもある。そうした所は沢の大きな石をはねながら下り、道らしいものを見つけてはまた上がったりすることを繰り返した。

その途中の道の側には直径で十五センチを超える山葡萄のツルや、ブナの立木に文字が刻まれたものがあった。近寄ってよく見たら「大正拾五年」と読めた。その下の字は判読不能だったが、これも当時から、否、そのはるか以前からの道であったことを裏付けるものではあるまいか。隣のブナには「忠」という人の名前らしい文字も刻まれていた。

やがて沢を横切り、また雑木林と杉林の中に入ったが、道形はしっかりしていて迷うようなこともなかった。山を巻くように下りながら歩き続けると、木の間から下の方に白い川原が見えてきた。草やぶを分けて急な坂を下ったとたんに目の前につり橋の太いワイヤーと、宙ぶらりんになった足場の角材が目に飛び込んできた。木川のつり橋である。

五十四年の時はろくな調査もしなかったせいか、橋がどこにあるかもわからなかったし、流されたというからには回り道するしかないと一ツ沢に下ったのだが、それにしてもその痕跡ぐらいはどこかにあるはずだと思ってあちこちで話を聞いてきた。しかしながら写真を見たこともなく、まったくその形も想像できなかったのである。興奮はなかなかおさまらなかった。

上のワイヤーの太さは三十ミリほどか、まだ錆もまわっていない。足場の角材はばらばらになっているが、それを支えていた下のワイヤーはやや細く、流木が引っかかったままであるだ

けでなく、右岸のアンカーをも動かしていた。水の力は今も恐ろしいものがある。

昼飯をとった後で浅瀬をこいで対岸に渡り、上の道路に上がってみた。長靴で渡れるくらいだから、水量は少ない方だろう。つり橋は木川分校跡のすぐ下になっていた。以前は道路のすぐ上が小さいグランドになっていて、分校跡を記念する木柱が建っていたように思うが、今は藪の中に石碑が建っていた。

空模様と時間を気にして、車の止めてあった林道の終点まで、もと来た道をもどる。一時間半ほどか。何はともあれ、萱野から木川に下る道を歩き、まったく想像だにできなかったつり橋までようやくたどりついたのである。近隣に住み、この山に出入りしている人はともかくも、置賜の黒鴨側の方から古道を探索し、このつり橋まで歩いたのは近年ないことであろう。しかしながらこの山中を歩く途中の気分や難儀さは、なかなか言葉でうまく表現できないものがある。一方で途中の山や沢の景観を見たり、この道を歩いて湯殿山に詣でた人々やその歴史を考えてみると、その背景にはやはり何かがあるような気もする。

民俗学でいうところの「成人登拝」や「通過儀礼」としての「お山参り」といった習慣がなくなってから久しい。少年から青年に、そして一人前の大人に成長していく過程にある種の区切りというか、ハードルを設定していた社会を、単に「古いもの」として切り捨ててきたのは正しい選択だったのだろうか。歩く人もいなくなった峠の廃道や、渡る人もいないつり橋はこれからのこの国の姿のように思えてくるのである。

帰ってきてから手元の古い資料などをみているうち、昭和四十二年に鮎貝小学校の校長をしていた守谷兎喜雄氏が仲間とこの道を歩いていたことを思い出し、資料の中から同行の一人がこのつり橋を渡っている写真を見つけた。むろん破損する前のつり橋である。だがそれから十二年後の私たちの時は、土地の人から「渡れない」と聞いたのだった。このつり橋はおそらく三十二年の木川ダム建設に伴ってかけられたと思われるが、仮にそうだとすればなおのこと、それ以前の古いつり橋はどんな姿であったのかが気になってくる。

ところでこの古道のこと、朝日町の方では

「朝日山新道」、あるいは「立木村木川新道」ということを最近になって知った。もっとも「湯殿山の行人に限って通行を許可した」というあたりや、「道智道」という言い方もあることは共通している。さらにかつてこの木川には「上ノ橋五間、中ノ橋七間、下ノ橋六間」というように三つの橋がかかっていた時代もあったという。

いずれにしてもこの間の萱野までの道といい、今回の木川までの道といい、黒鴨を夜中の二時、三時に出発したらこの峠の山道はまだ足元が見えにくかったのではあるまいか。仮に提灯をつけたとしてもどれほどの明かりだったろうか。「前を歩く人について行くのに必死だった」とは聞くが、昔の人は足だけでなく、目もよく見えたというからまだ暗い山道もさほど苦にならなかったのだろうか。ひとつのことが済むとまたすぐに別の疑問が生じてくる。このところその繰り返しである。

■　お知らせ

平成２６年度研究発表会
日時：平成２７年２月２８日（土）
　　１３：３０～１６：００
場所：白鷹町中央公民館（白鷹町荒砥甲）
内容：
　１　絵はがきで見る「大正・昭和の白鷹」
　　佐藤健一
　２　五十公野城の落城と逃走
　　江口儀雄
　３　深山観音堂境内発掘調査報告
　　平吹利数
その他：終了後懇親会をおこないます。是非御参加ください。
　　会費 会員 1,000 円　非会員 1,500 円